同志社大学国文学会彙報

昭和五十六年度国文学会活動状況

〈講演会〉（六月二十七日　至誠館21番教室）

・民間文芸の採集について　宮岡　薫（甲南大学助教授）

・華南の少数民族を訪ねて　土橋　寛（本学名誉教授）

〈教育問題懇談会〉（八月一日　京都府立勤労会館）

実践報告

・論説文　武田泰淳「限界状況における人間」（筑摩現代国語2所収）の実践　沢田　武男（京都府立朱雀高校教諭）

・中学校における生活指導——現場からの報告——　梶垣　千鶴（大東市立北条中学教諭）

〈総会・研究発表会〉（十一月二十三日　光塩館会議室）

研究報告

・狂言の方法について　稲田　秀雄（本学大学院生）

・小町伝説の秘密——付スライドによる小町遺跡——　明川　忠夫（同志社香里中・高等学校教諭）

昭和五十六年度卒業生卒業論文題目

〈日本文学古代前期〉

柿本人麻呂の泣血哀慟歌——亡妻挽歌の系譜を通じて——　中西百代

人麻呂終焉歌群——その死の伝説化について——　越田敦子

額田王論——その歌の展開を中心にして——　橋場俊弘

額田王——作品と歌人としての性格——　久保栄一

志貴皇子——境遇と歌——　石原文

憶良と民衆——貧窮問答歌を中心に——　石山裕子

防人歌の研究　瀬川弘美
狭野茅上娘子　山内恭子
大伴家持の依興歌　高橋昌彦
万葉集における反歌意識の変遷　栗岡みや子
古事記神話の一考察
——言語にみる古代信仰について——　山本美智子

〈日本文学古代後期〉

『伊勢物語』の同化の方法
——業平から昔男へ——　堀登志子
『伊勢物語』の表現と本質　池田冬子
『伊勢物語』の方法
——業平から昔男像へ——　鎌田久美子
虫めづる姫君・私像　佐藤桂子
『和泉式部日記』
——その抒情の陰翳と飛翔——　北野幸
はかなさの超克・和泉式部像　加村理津子
『源氏物語』の始発におけるゆかりの在処
大君　中井幸子
——閉塞された愛——
夕顔物語試論
——反復する問答類型と
その隠蔽についての考察——　伊郷淳子
若菜女楽試論　井上史
平安時代の女の宿世について
——源氏物語二部世界に即して——　佐々木博邦
光源氏の存在原理　片山彰子
『枕草子』美の昇華　隅地伸子
『源氏物語』と「帚木伝説」　竹中由起代
新田富美子

〈日本文学中世〉

『今昔物語集』巻十七地蔵説話について　竹内理子
『今昔物語集』における「悪」の論理
——巻二九を中心として——　山本泉
新古今和歌集の配列構成意識
——「新古今時代」の再検討——　生澤喜美恵
藤原良経・花月百首以前　高木ゆみ子
『平家物語』俊寛説話考　平石容子
平家物語における「小宰相」について　冨田玲子

知盛をめぐって
——覚一本『平家物語』より——　村井恵子

維盛論
——高野・熊野説話を中心に——　吉田恭子

俊寛像の形成
——覚一本・長門本・延慶本をめぐって——　生島佳代子

祇王説話　野崎万里子

物狂い考　島内由紀子

謡曲『自然居士』の成立基盤　植松朋美

宮増曽我物の在地的特性　小池茂

下剋上の世界　井上卓也

説経『小栗判官』の考察　柳田富美子

「さんせう太夫」研究史　吉田剛士

『徒然草』にみられる兼好の芸術観
——中世芸術確立への序曲——　吾藤慎一郎

『とはずがたり』論
——心情語からの考察——　土井美春

『西鶴諸国はなし』について　沢田晶子

『本朝二十不孝』の性質についての考察およびその位置づけ　村上真千恵

西鶴の武家物における意義　岡出利子

『日本永代蔵』私論　佐々木喜一

『好色五人女』について
——中段に見る「暦屋物語」をめぐって——　川上智子

『好色五人女』について
——おさんを中心に——　芝辻典子

『好色五人女』巻一
「姿姫路清十郎物語」について　角田幸子

『好色五人女』巻一
「姿姫路清十郎物語」についての考察　柴田仁

『好色一代男』の世界　西村育子

「曽根崎心中」観音めぐり
——その存在意義について——　吉岡克恵

姦通物における近松の創作態度　北川由紀子

『鑓の権三重帷子』の悲劇性について　井口涼好

『堀川波鼓』小論　平塚知可子

「大経師昔暦」について
——おさんの性格描写を中心に——　山村恭代
「心中天の網島」における改作の実態と必要性
——「心中紙屋治兵衛」
「時雨の炬燵」を中心に——　小島佳子
近松の「判官物」について　皆見津也子
作品論『出世景清』
——古浄瑠璃との比較を通して——　井出健
荒事の成立
——その研究史を中心に——　藤川公美子
歌舞伎評判記における坂田藤十郎　澤幡朋子
近松歌舞伎狂言についての小考
——「悪」の型と変化を中心に——　古賀悦子
元禄期の歌舞伎における「幼児殺し」の意味
——「幼児殺し」をめぐる
悲劇の構想——　藤田由紀子
上方狂言本の性格
——狂言本に記載された
評判を通して——　友田博
芭蕉初期の句風
『野ざらし紀行』富士川の条について
——荘子の影響を考える——　許斐慶子

〈日本文学近代・現代〉

森鷗外『灰燼』
——近代小説との訣別——　上野布貴
「にごりえ」考　関谷泉
「にごりえ」ノート　白木恵子
昭和期の萩原朔太郎の問題　森中明広
啄木の口語詩の意識
——『心の姿の研究』を中心に——　堀士貴子
啄木の思想の変遷
——詩と評論を通して——　増田紀子
『細雪』論　布留川規夫
高村光太郎とその自然思想　高屋典子
「昭和八年詩ノート」を
中心とした〈立原道造論〉　渡辺一
堀辰雄の世界
——『菜穂子』を中心に——　神原玲子
堀辰雄と『風立ちぬ』　嘉藤真理子

『或る女』論　青木隆之
川端康成の美的世界について
——「千羽鶴」と「山の音」を通して——　小林由佳
「上海」
——「旅愁」への展開——　小川直美
太宰治論
——「人間失格」を中心として——　山野正
太宰治『お伽草子』
——その題材の選択を中心にして——　野本謙仁
坂口安吾に関する断片的覚書
——初期のファルスを中心にして——　山本博之
島尾敏雄論
——夢幻的作品群を中心に——　杉本篤彦
安部公房論
——都市生活者への視点——　財津恒二
初期安部公房論　久保見ゆかり
遠藤周作論
——「沈黙」を中心に——　栗本亜美
大江健三郎論
——「個人の根」から「共同の根」へ——　浅田里花
立原正秋「剣ヶ崎」論　井尻潤子
木下順二論　沼田美保

△国語学▽

風（フウ）とかぜ　有本博子
「つみ」と「とが」の意味史　松下ひとみ
和語「よ」の意味の変遷　松下祐子
「おもふ」の意味領域の変化と派生語・類義語との関係について　長縄真里子
優にやさし　西岡文美
数詞における和語と漢語の変遷　中田恵子
神以前から神へ——過去・現在・未来の分野における語彙の変遷——　大塚八重子
助動詞ベシの文体論的考察——和漢の対立と混淆——　宇都木裕子
中国語から日本語へ——漢文の受身表現を——　藤井俊博

めぐっての考察――　佐々木　雄介
『御堂関白記』における漢文和化について　山下　昌美
日本語の尊族・卑族の
呼び方における語彙変遷　北川　久美
体言止め歌について
――新古今的なものを中心に――　河原　俊介
「～しない前」という表現とその周辺　葛野　玲子

執筆者紹介

広田　収……本学専任講師
明川　忠夫……同志社香里中・高等学校教諭
柳田　洋一郎……大阪市立第二工芸高校教諭
今井　昌子……本学講師
谷口　広之……本学大学院昭和五十三年度修了生
鈴木　昭一……帝塚山短期大学教授・本学講師
岸　健治……平安女学院中・高等学校教諭

編集後記

近代文学の分野で、鈴木昭一氏・岸健治氏の論文を掲載することができた。なかでも帝塚山短期大学の鈴木教授から賜わったことは我々の望外の喜びである。

他の諸論考は伝承理論に関するもので、「説話・伝承学会」の動向とともに、本学で本年度より特殊講義民間伝承が開講されていることに寄せられたものである。国文学研究を切り開いていく方法として民間伝承論は有効かどうか、その問題提起となれば幸いである。

（広田　収）